

國學院大學學術情報リポジトリ

発題3教育実践総合センターにおける学生支援の現状と課題

(平成二十五年度國學院大學人間開発学会第五回大会
公開講演会・シンポジウム：
私学教員養成系学部における「質保証」システムを
どう構築するか)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小笠原, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001259

発題③

教育実践総合センターにおける学生支援の現状と課題



小笠原 優子

【キーワード】

社会体験的な実習、地域連携、教育インターンシップ、子ども理解、学生の資質や個性の生かし方

1. はじめに

人間開発学部を設置されている「教育実践総合センター」の(註1)役割は、社会体験的な演習・実習等を通じた大学と地域社会の連携による「共育」の実践を行い、地域に育てられ地域と共に育つ人材の育成(人間開発学部の目的(3))⁽³⁾ することである。

これまでに、教育実践総合センターでは、教育インターンシップなどの教科科目の支援を行ったり、学内外の関係機関との連携のもとに教育に関する理論的・実践的研究および指導に關わったりしてきた。

最近の学校現場では、若い教員の増加、就職して間もない時期に早期退職する教員の増加、子どもや同僚とコミュニケーションのとれない教員等、様々な問題点が報告されている。

このような学校現場の状況の中、人間開発学部教育実践総合センターとして、教員養成をどのように考えていくか、人間開発学部のめざす「頑張ることを応援する」指導者を育てる(註2)ために力を入れていくことは何かを探っていく必要がある。教

員採用試験に合格し「教職に就く」ことができて、子どもを育てる教師としての力をつけていけないことには、学校現場で教師として力を発揮することはできない。子どもを目の前にして「頑張ることを応援する」教師として実践して行く力と感性が必要とされる。また、同僚と力を合わせて子どもを育てるために、共に問題を解決する力も必要とされる。

このような教師としての実践力や感性につながる経験を、学生の時代から教育インターンシップや教育ボランティア等を通して学校現場の教師や子どもの姿から学び、その力を身につけることができるのは、教職をめざす学生にとって貴重な実践力を付ける源になると考える。

平成二十二年度から始まった教育実践総合センターの取り組みや教育インターンシップの授業開講は今年で四年目をむかえた。昨年度卒業した人間開発学部一期生は、各地域の小・中・高等学校等の学校現場で教壇に立ち、活躍している。

本研究では、本学部教育実践総合センターにおける四年間の取り組みから見えてきた学生支援の成果を分析することから、教育実践総合センターとしての教員養成支援の現状と課題につ

いて明確にしていきたい。

2. 本研究の目的と方法

(1) 研究目的

本研究では、教育実践総合センターの学生支援の現状をまとめるとともに、学校現場の経験を通じた学生の学びが学生の成長にどのように関わったかを見ていく。特に、教育インターンシップをはじめとする学校現場における実習や活動を通して、学生自身がどのような問題意識を持ちながらかわり、どのようにその後の自らの成長に役立てていったかを分析したい。このことを通して、教育実践総合センターとしての学生支援の成果と課題が見えてくると考える。

(2) 研究の方法

具体的には、第一に、教育インターンシップ4年間の実施状況を中心に教育実践総合センターの学生支援の現状、第二に、教育実践総合センター主催の夏季教育講座、教育ボランティア等、地域教育関係機関との連携における学生支援の現状、第三に学生の学びと学生支援の関係について分析し、教育実践総合センターの学生支援の課題について明確にしていきたい。

教育実践総合センターの学生支援の現状については、教育実践総合センターに寄せられる、教育インターンシップ実習にかかわる相談や報告をもとに見ていくとともに、学生の学びの状況とかかわらせて分析していきたい。

教育インターンシップ終了後の教員採用試験に関わる相談についても、その相談内容から分析していきたい。

本研究は、教育インターンシップ、教育ボランティア、教育実習、教員採用試験の受験等、四年間の学生の学びと成長について分析し、学生の学びの段階における対応を探るものである。

3. 教育実践総合センターにおける学生支援の現状

(1) 教育インターンシップの実

施状況と学生支援

教育インターンシップにかかわる学生数は、毎年八十名を超えている。また、初等教育学科の学生に比べ健康体育学科の学生数が少ない。

数値からは毎年同じような状況に見えるが、二十二年度は、約半数が横浜市青葉区での活動であり、年を経るに従い、出身校での活動が増加している。

また、健康体育学科の学生数の割合は、今年度は最も高い割合となっていて、健康体育学科学生の活動を施設別にみると、幼稚園3名小学校5名、中学校8名となっている。

また、年度を経るに従い、学生一人の平均活動時間の増加が見られ、教育インターンシップ終了後も教育ボランティアとして活動を継続する

表1 教育インターンシップの実施状況

年 度	初等教育学科	健康体育学科	計
平成22年度	79名	8名	87名
平成23年度	66名	14名	80名
平成24年度	74名	12名	86名
平成25年度	68名	16名	84名

ケースが増加している。
 学生の教職を目指す意識が一人一人でも異なり、社会体験的な実習を通して進路を決定したいという要求から、複数の校種や複数の地域での活動を希望するケースもでてきている。

表2 教育インターンシップに関わる学生支援

回数	内 容
第1回	◇教育インターンシップの目的・目標と内容 ◇学校教育とは ◇履修方法と、受け入れ校の見つけ方 ◇希望調書作成／リアクション・ペーパー記入
第2回	◇教育ボランティアと教育インターンシップ 基本的な姿勢／先生方・子ども達に対して ◇ハラスメントについての知識と心構え ◇教育インターンシップの実際と留意点（1） A. 勤務に関する留意点（時間・健康・所持品・金銭） B. 児童・生徒との関わり方について留意点 ◇配属校の発表、個人調書・誓約書・依頼書の作成
第3回	◇「教員の服務」の確認 ◇個人情報に関する秘密の厳守について ◇活動記録カードの作成と保存について ◇教育インターンシップの留意点（2） 「事故の予防と対処について」

■教育インターンシップに関わる学生支援

教育インターンシップに関わる学生支援として事前、活動中、事後の三つの時期の支援がある。

①教育インターンシップ事前の学生支援（事前指導）

教育インターンシップ開始前に、事前指導を三回行っている。ここでは、教育インターンシップ経験者の話を聞く場面も作り、希望調査を取りながら、個人の要望や関心についてもとらえている。

②教育インターンシップ活動中の学生支援

教育インターンシップの活動中は、教育実践総合センターに寄せられる学生の相談、活動記録の提出、受入校・園への訪問指導を通して、学生の活動状況を把握している。

事前指導が終わり、実際に学生の教育インターンシップでの活動が始まると、学生の個別の相談が多く入ってくる。開始時期からの学生の相談内容から支援の状況は次のとおりである。

◇開始時期の学校へのコンタクトの取り方から

A 金曜日が見えまじいと言われました。九月までは無理なので、授業を欠席した方がよいですか。

B どうでしょう。先生のスーツ貸してください。

右の例にあるように、学生の立場で学校に連絡をすることは、誰もが緊張するようである。学校の管理職から言われたことに對して「なるべく自分の体制を合わせなければいけない」と思うよう、学生Aは大学の授業を休んでいくべきか迷い、Bは、電話連絡した当日に学校長から「来るように」言われ、自分の

服装では学校訪問にふさわしくないことと焦り、相談にきた。

相談後、Aは、「自分の状況を説明し、自分のできる範囲でできる限りのことをする」というスタンスをとることが出来た。

Bは、「校長先生は普段の服装で大丈夫」と言ってくれたが、「学校には他の先生方や子ども達もいる」ので、「今日の服装が訪問にふさわしくない」と伝えた。

このように、学生は、打ち合わせの段階から自分の状況を説明するという経験をする。各学校との出会いは様々であり、一人一人に合わせた支援体制が必要である。

◇子どもとの出会い、子どもとのかかわりから

A 「先生、創造性あるね。だって話が上手だもん。」と言われた。会ったばかりなのに、すぐ分かるのにはびっくり。

B 楽しい。みんな寄ってきてくれる。

C 「若い人が来ると、子どもたちが違う。泣いていたのに泣きやんでくれた。」と。

D 「この子を見ていて」と言われたが、一番前の席に座っていて、自分はどうみていいかわからなかったけど、しゃがんで隣でずっと見ていた。

E メモに自分の紹介を書いて渡してくれた男子がいてうれしかった。それから・・・この間目つきが怖いと思った女子は、よく話したら、おとなしくてかわいい子だった。

F 国語の教科書を、一回目は一緒に読むことができたが、「もう、やだ。だめ。」と言われた。

G 3年生が引退に向けて相談に来て、「後輩に感謝されるように引退したい。」と言われました。3年生は2年生よりレベルが上ではないので、思いが分かるんです。

学生は、子どもとの出会いやかかわりから、様々なことを感じ取り、学んでいく。教育インターンシップの目的「子どもたちとの交流を通して体験的な『子ども理解』を促進する」(註3)に繋がる多くの経験をするのである。

出会いの場面では、A、B、Cのように、殆どの学生が子どもとの出会いを明るい声で報告に来る。その反対に、Dのように、初めて関わることへの戸惑いを示す学生や、Eのように第一印象だけで子どもを判断してしまう場合もある。また、Fは特別支援級の児童との関わりで、自分が想像していなかった児童の反応に戸惑い、どうすべきか悩み、Gは部活動の生徒から相談されるまでの関係づくりができ、その対応について考えようとしていた。

子どもたちは、「若い先生」ということで、学生の存在を歓迎する場合が多いが、反面、警戒する場合もある。相談に対し、学生自身が、長い時間子ども達と関わることで、「子ども達がどう考えているか」「どういう思いを持っているか」等をとらえられるということを伝え、長いスパンで「子ども理解」を深めていくよう言葉かけをしている。

それぞれの相談内容は、学生の置かれている周囲の状況で異なり、学生の個性も異なるため、それぞれに対する支援が必要になる。

また、困ったことがあっても、自分から相談できないという学生のケースや、学校現場にも何かあったらすぐ連絡していただく体制をとっているが、学校から連絡を頂けないケースもある。

◇学校行事の経験から

A 体験学習の集合7時半なので始発で行きます。夜の当番（不寝番）が4時からで早朝のハイキングも担当。前日はアルバイトだし……。大変そう！

B 体験学習。先生方は大変！担任の先生は「寝ていない。」っておっしゃっていました。

学生Aは、「大変そう！」と言いながらも。学校現場の先生方に頼りにされたことで頑張ろうという気持ちを含め、忙しい自分の生活状況であっても、子ども達のために、自分の学びのために、宿泊体験学習等の行事に参加することにした。

教育インターンシップの活動は、「大学の授業のない時に行う」ことになっているが、現状は、自分自身の学びになると判断し学校現場の先生方や子どもたちとの関係から、学生自身が行きたいと考える状況がある。授業のテーマを「地域諸学校との連携による実践体験型学習」^{註3}とするからには、宿泊体験学習等の行事で学生が教育インターンシップを通して学ぶための時間の確保が必要であるが、学生の体験を生かせるような体制が十分取れていないのが現状である。

③教育インターンシップ事後の学生支援

教育インターンシップ事後の学生支援と大きく関わるものとして、教育インターンシップ報告会とリポートの作成がある。

教育インターンシップ報告会は、受入校・園を対象とした教育インターンシップ連絡協議会と兼ねて十二月に行っている。

この形式をとって三年目になるが、今年度は時間を長くとり、

学生代表者の報告から課題提起をし、受入校の先生方と学生と本学教員の構成で、グループ別の意見交換を行った。

学生からの課題は、「子どもへのかかわり方」についての内容が多く、特に「どのように褒めたり注意したりするのがよいか」や「授業中の指導の助言をどのようにしたらよいか」などが挙げられた。学生一人一人が教育インターンシップを通しての課題を報告し合い、学校現場の先生方の意見を聞きながら学ぶことができたことについて、「よいアドバイスを頂いた。」意見交換の時間があってよかったなどの学生からの感想が出た。

教育インターンシップの活動終了後、学生から、また、次のステップへの相談が寄せられる。「もっと学校現場で勉強したい」他の学校（異なる校種や異なる地域の学校）で活動した方がよいかなどの相談である。学生の希望する校種や地域、または特に学びたい内容を聞き、学生本人の気持ちを確認しながら、受入校をあたっている。このように、教育インターンシップ校でボランティアとして活動する学生、他の地域や他の校種でボランティア活動をする学生の数が増えてきている。

(2) 地域教育関係機関との連携における学生支援の現状

■地域教育委員会・校長会との連携

横浜市教育委員会との連携として、平成二十二年に、「横浜市教育委員会と國學院大學との連携・協力に関する協定書」と「アシスタントティーチャーに関する覚書」を交わしている。

また、神奈川県教育委員会との連携として、「スクールライフサポーター派遣事業に関する協定書」を交わしている。

これらの協定のもと、横浜市で教育インターンシップの活動

を行う学生の中でアシスタントティーチャーとして申請し一年間活動する者や、神奈川県ティーチャーズカレッジに入塾し、スクールライフサポーターとして活動する者もいる。

各教育委員会の教員採用試験に関わる説明会も学内でを行い、各教育委員会と連携して共に学生を育てる体制づくりに繋がっている。また、教職をめざす学生がどのような力を付けていくべきかを考える機会となっている。

校長会とのつながりについては、教育インターンシップ受け入れのお願いのため、青葉区小中学校長会と宮前区小学校長会と連携している。横浜市校長会との連携では、教育実習委員会に所属し、教育実習の所属校について報告している。

■地域との連携

教育インターンシップの活動から、地域との連携が強まり、学校や園から大学に対し次のような様々な要請が寄せられる。

学校名	内 容
新石川小学校 元石川小学校	夕涼みの会、陸上練習 餅つき大会
山内小学校 美しが丘西小学校	陸上練習、個別支援学級ミニコンサート タグラグビー練習

表中には示していないが、その他、運動会のボランティア募集が近隣校から寄せられている。このような活動は、教育インターンシップをまだ経験しない一年生も多く参加し、学校現場とのつながりをつくるきっかけになっている。

地域教育機関との連携から、学生の一年次から四年次までの動きについて次に示したように、自然と形ができてきている。

◇一年次	ボランティア活動（運動会、夕涼みの会、もちつき大会 等）
↳	
◇二年次	教育インターンシップ ボランティア活動（教育インターンシップからの継続）
↳	
◇三年次	教育実習の開始 ボランティア活動（インターンシップからの継続又は新たな地域へ）
↳	
◇四年次	ボランティア活動、横浜AT、神奈川県スクールライフサポーター、川崎市支援員、東京都教師養成塾
↳	
◇教員採用試験	千葉たまごプロジェクト等

また、教育実践総合センターが毎年八月に行っている夏季教育講座の内容は次のとおりである。

夏季講座では、それぞれの年度で、講演やグループ別研修、

年度	フォーラム名・テーマ	講師・担当
21	道徳教育実践研究夏季セミナー 『新学習指導要領のねらいを実現する道徳教育の実践』	谷田増幸（文部科学省教科調査官） 他 田沼茂紀教授
22	社会科実践フォーラム 『社会科の授業づくりと評価～今、何が求められているのか？』	澤井陽介（文部科学省教科調査官） 他 柳下則久（横浜市教育次長）、安野功教授
23	特別活動実践フォーラム 『今、求められる確かな集団活動指導力とは何か？』 ～新しい年間指導計画、指導案モデルや指導法、学校・学級経営を追究する研修講座～	杉田洋（文部科学省教科調査官） 城戸茂（文部科学省教科調査官） 他 新富康央学部長、宮川八岐教授
24	英語活動実践フォーラム 『これから求められる教師像～積極的な受信と発信を促す指導』	直山木綿子（文部科学省教科調査官） 他 行廣泰三（國學院大學講師）、新富康央学部長
25	理科実践フォーラム 『子どもが生き生きする理科の授業づくり～授業づくりの具体的な手立てと授業に役立つ教材の工夫～』	村山哲哉（文部科学省教科調査官） 他 寺本貴啓准教授

鼎談やシンポジウムを通して研修を深めてきた。学生の参加は年々増加し、二十五年度は卒業した一期生も参加する理科実践フォーラムとなった。

（3）学生の学びと学生支援

ここでは、大学4年間の経験を経て現在教壇に立っている卒業生の「こえ」から、その学びと学生支援の関係について探ってみたい。

一期生への質問は、次のとおりである。

「教育インターンシップ、教育ボランティアの経験を通しての学びと課題が教職につくまでの自分、教職に就いてからの自分にどうつながっているか。どう影響しているか。」

■子どもにかかわる教師としての姿勢

Y教諭は横浜市青葉区の公立A小学校で教育インターンシップの活動から始まり他の区の公立日小学校で教育ボランティアを行い、現在この日小学校教諭として教壇に立っている。

Y教諭は、対照的な学級での経験を今の自分に生かしている。叱ることと子どもを生かすことを考えて子どもと対面する様子を次のように語った。

担任の先生の子どもの関わりに自信のない様子が、子どもにも伝わっているのか、子ども達が先生に対し非難するような言葉を発していた。先生の指導もネガティブな雰囲気になり、後に休職することになった。

先生が常に笑顔で子どもの意見を尊重する。「やってみようか。」と自主的な活動の機会を与える言葉かけが印象的であった。子どもは生き生きと活動し先生のことを「好き」という雰囲気があふれ、担任も子どもも笑顔が印象的なクラスだった。

先生が常に笑顔で子どもの意見を尊重する。「やってみようか。」と自主的な活動の機会を与える言葉かけが印象的であった。子どもは生き生きと活動し先生のことを「好き」という雰囲気があふれ、担任も子どもも笑顔が印象的なクラスだった。



今の自分は、ほめることを大切にしたい、指導するべきこととは指導するが、いけないことをしてもその子なりの理由がある、ということをお忘れなくしたいと思っている。

三年生のクラスで、先生が叱っている状態のときに、子どもは、「理由があつたんだ。」と話していた。…自主的に活動を与えることによってのびのびと生き生きと教師も子どもも笑顔になれるようになるということを、伝えていき、いい雰囲気の学習ができるようにしたい。

■子どもの理解と学習指導

I教諭は、青葉区公立U小学校で教育インターンシップの活動から継続して教育ボランティアを行い現在は公立小学校で勤務している。出会ったM教諭の指導から学び。今の自分にも生かしている。

M先生は、違う問題に対しても一人一人対応していた。…M先生は子どもの変化をメモする、一日一日の成長を逃さないように、例えば、「ひき算の繰り下がりの計算が出来た」というようなスモールステップを作りながら子どもを見取ることをしていた。



今、クラスの児童の差について考えている。同じ教室の中に、めあても書けず、ひらがなも書けずにいる子もいれば、五分で全ての問題を解ける子もいる。今のままの学習の進め方でよいのかと考えている。M先生の指導を思い出しながらやっていきたいと考えている。

I教諭は、教育インターンシップで出会ったM先生の個に応じた指導を思い出しながら、自分が担任する子どもたちに対する指導方法について見直そうとしている。また、学生時代の遠足の経験の振り返りから、今年は、遠足の経験を国語の学習と結び付けようとしている。

学生時代、動物園への遠足の引率を経験した。その時は、特に目的を持たずに行ったが、今年の動物園への遠足には、目的を持っていくようにした。国語の動物園の獣医さんを紹介する授業と関連付け、「飼育の仕事を1年生に伝えよう」という目的を持って行った。目的意識を持つと子どもたちは違う、学習と結びつけることが大切と感じた。

■学習指導法の学びと教師の連携

S 教諭は、青葉区内 N 中学校で教育インターシップの活動を行うが、小学校でも体験したいという問題意識から公立 N 小学校と公立 M 小学校で教育ボランティアを行い、現在は公立 K 小学校に勤務している。

M 小学校の活動を始めてから、学校によって特色が違うことが分かった。一年生から六年生に入り、学校の中でも一人一人の先生方の指導の違いに気づいた。優しい雰囲気クラスと厳しい雰囲気クラスなど。ほめるときは「ここがよかったね。」など、ほめ方についても学んだ。学級が違って先生同士つながっていて、学年のまとまりもあると感じた。

「体育の勉強をしたい」と思い、K 先生に相談すると、「○先生の授業はいいよ。」「○先生は研究しているよ。」と情報をくださった。また、K 先生の教室は温かい雰囲気でも子どもたちもすぐ受け入れてくれた。

学習では、子どもたちは、ノートの考えを隠すことなく、「考えを聞いてみよう」という先生の指導が子ども達に伝わっていた。「いいことを見つけよう、考えよう」「自分だったらどうするか考えよう」など、子どもたちは学習の中で考える場面を大切に実践していた。

現在、先生同士のつながりを大切にしようとしている。「○さんはどう思っているの?」と聞く前に、自分の考えを持ち、自分の考えを言うから聞くという学び方を身につけることが出来た。

S 教諭は、自分の経験から持った問題意識を次のステップへと考えながら踏み出していった。教育実践総合センターとして「学びたい」内容の相談を受け、新しい経験ができるように支援したが、新しい環境に入っても自分の力で進んで学びを深め、人のつながりの大切さも感じ取っていた。

最後に、教員として教壇に立って、改めて「教育インターシップ」について振り返り、次のような感想を寄せてくれた。

教育インターシップの頃のことをあらためて考えると、教師の指導法や授業づくりや学級経営を見ることも大切だったが、その当時は子どもと向き合うことが新鮮だった。大学で講義を聞いていても経験できなかったことと出会えた。教育インターシップを通して、それまでに学生である自分の身の回りにいなかった子ども達、外国につながる子ども達や特別支援級の子ども達、一人一人とかわれることが新鮮だった。

教育インターシップやボランティアのときに、もっと授業の組み立てをしっかり見ておくべきだったと感じている。実際に学校現場に入ってから、なかなか見えない状況がある。

4. 学生支援の課題

教育実践総合センターの学生支援の現状について、四年間の取り組みをまとめた。また、教育実践総合センター学生支援の状況を教育インターシッパやボランティアを経験した学生の学びを中心に、振り返り述べてきた。

四年間の成果で最も強く感じているのは、「先生方、子どもたち、教育関係者からの学びの充実」と「近隣教育関係機関との信頼関係の構築」である。学校現場の先生方や子ども達の姿から様々な経験を通して、

学生一人一人が学び取ったものは多種多様にわたっている。また、「近隣教育関係機関との信頼関係」については、「学生自身の活動から生まれた信頼関係」が多く存在する。初期の段階では、大学二年生という未熟な学生では「まだ無理ではないか。」との声が学内外から多く聞かれたが、実際の学生の活動の実績から、「助かります。」「是非教員を目指してほしい。」などの現場の先生方からの声を頂くこともあり、受け入れ希望校も多くなった。

教育実践総合センターの学生支援の課題としては、次の3点が挙げられる。

- ① 「入学から卒業までの段階に合わせた大学の組織・体制作り（学生の取組の見通しの明確化）」
- ② 学生の資質や個性の生かし方
- ③ 教育関係機関の要請の地域による違い

①については、入学からそれぞれの段階に合わせた大学の組織・体制作りを行うとともに、それぞれの学生の取り組みに見通しをもてるよう指導していく必要がある。実際に教育現場の体験を通して動き、感じ、どう行動するか、自分で判断し、次のステップに進むためにはどうするかを学生も見られた。

②については、それぞれの学生の出会いや内容や場が異なること、その出会いからの学生の感想や学びが異なること等が、状況として見られる。学生一人一人の資質や個性によって、もつ感じ方や問題意識も異なるということである。

さらに、③については、学生の関わる地域や教育委員会の取り組みの特色が異なるため、その特色を的確にとらえ、学生の学びに生かす方策を考えていく必要がある。

教育インターシッパの要望が学校により異なること、また、さらに、教員採用試験ともかわる教育委員会等の要望も各地域によって異なるのである。その中で学生の個性を生かし、それぞれが教職に向けて動き出すことができるようにするために、どのような体制が必要であろうか。

教育インターシッパでの学びを生かすためには、教育実践総合センターの学生一人一人の課題に合わせた支援を充実させるとともに、学生自身が実感した学びを交流する情報交換の場を充実させた「共同「連携」の視点に力を入れる必要がある。学生の出会いの場は様々であり、その学びも様々であるならば、交流の場や情報交換の場を通して学びを深めることができる。考える。

また、教育インターシッパや教育ボランティア、教育実習、教員採用試験を経て教職に就くまでの過程において、学生の個

性を生かすためには、入学時からそれぞれの段階に合わせた大学の組織・体制作りを行う必要がある。一期生の学びや進み方に見られた個人差と広がりから考えても、学生一人一人の個性を生かすことのできる大学の組織・体制作りを行う必要があると考える。

教育実践総合センターとしては、教育インターンシップを通してその目標の「学校等に身を置くことで、教育に対する実践的理解を図り、教職へ向けた学びの展望を得る。」^{〔註3〕}ことから、次のステップへとつなげる体制を探り、時期や学生の学びの段階に応じて、支援を考えていく必要がある。

学生個人が自分で問題意識を持ち、解決していく過程を大切に、教育実践総合センターとして学生支援を考えることを目指していきたい。

註

- (1) 人間開発学部ガイドブックP3
- (2) 人間開発学部ガイドブックP1
- (3) 教育インターンシップガイドブックP2

（おがさわらゆうこ 國學院大學人間開発学部教育実践総合センター専門研究員）